青年期女性の自己形成における「知」の認識の発達の役割

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-01-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: TSUJI, Hiromi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3924

BY-NC-ND

青年期女性の自己形成における「知」の認識の発達の役割

心理学部　心理学科　辻　　弘美

人間の発達において「知」の認識は質的に異なるというという捉え方は、Piaget による発生的認識論にその基盤をもとめることができる。「知識とは何か」、また「知識はいかにして得るものなのか」についての認識は、情報社会に生きる人間の自己形成においては特に重要である。本研究は、多様な価値観が存在する今日社会において、女性のライフサイクル的な視点から、「知」の認識の発達変化が、青年期の女性の自己形成にどのような役割を果たすのかについての検討を行った。具体的には次の３つの課題を通して、「知」の認識を把握するための方法論について、欧米の先行研究をもとに、文化的な特徴を踏まえた面接法および質問紙法の検討を行った。

1. 日本語版認識論的信念尺度（平山・楠見、2010）を女子大学生に対して実施し、先行研究と比較検討をしたところ、先行研究の因子構造と異なる結果が得られた、また、尺度の信頼性は、先行研究での報告と同等に低いものとなり、日本語版認識論的信念尺度の課題が浮き彫りになった。

2. Belenky、Clinchy、Goldberger、Tarule（1986/1997）によって開発された「知」の認識に関するインタビュープロトコル（The epistemological development interview）に基づき、日本文化に即したプロトコルを作成し実施した。インタビュー対象者が10名程度と、量的分析の実施には至らなかったものの、これらのインタビューをもとに質的な分析を行った。

3.「知」の認識についての発達をとらえるための主観的評定尺度の設計を、日本語版認識論的信念尺度（平山・楠見、2010）の課題をもとに行い、「知」の認識発達尺度（仮称）を作成した。これらを用いて、女子大学生および、高校３年生を対象として、青年期における「知の認識」の発達変化について検討した。その成果を青年期における「知の認識」の発達変化と進路選択の検討として論文にまとめた（大阪樟蔭女子大学研究紀要第４巻に掲載：「青年期における『知の認識』の発達変化と進路選択の検討」）。

論文概要は次の通りである。

本研究は、高校３年生および大学１年生の青年を対象に、「知の認識」に関しての個人の考え方について情報収集を行った。これらのデータを、高校３年生という進路決定時期の「知識」の捉え方と、大学１年生のそれが横断的にどのように異なるのかを比較し、その発達の様相について考察した。高校３年生と大学生のとらえる「知の認識」と発達的な変化がみとめられた。高校３年生から大学１年生の１年間の発達的な変化には、性差の要因があることを示唆する結果が得られた．また、高校３年生については、進路選択と「知の認識」の関連性についても検討した。大学、短期大学や専門学校進学、就職といった進路によって、「知の認識」に違いがみとめられ、進路選択の際に、「知ること」・「学ぶこと」に対する認識が関係している可能性が示唆された。

これらより、高校生のデータからは、進路選択と「知の認識」に関係性がみとめられたことから、「知」に対する考え方や態度は、どのような進路選択をするかにも多少なりとも影響している可能性が考えられた。

引用文献

Belenky, M. F., Clinchy, B., Goldberger, N. R., & Tarule, J. M. (1986). Women's Ways of Knowing: The Development of Self, Voice, and Mind. New York: Basic Books.

平山るみ・楠見孝（2010）．日本語版認識論的信念の尺度構成と批判的思考態度との関連性の検討 Japan Journal of Educational Technology 34, 157−160, 2010−12−20.